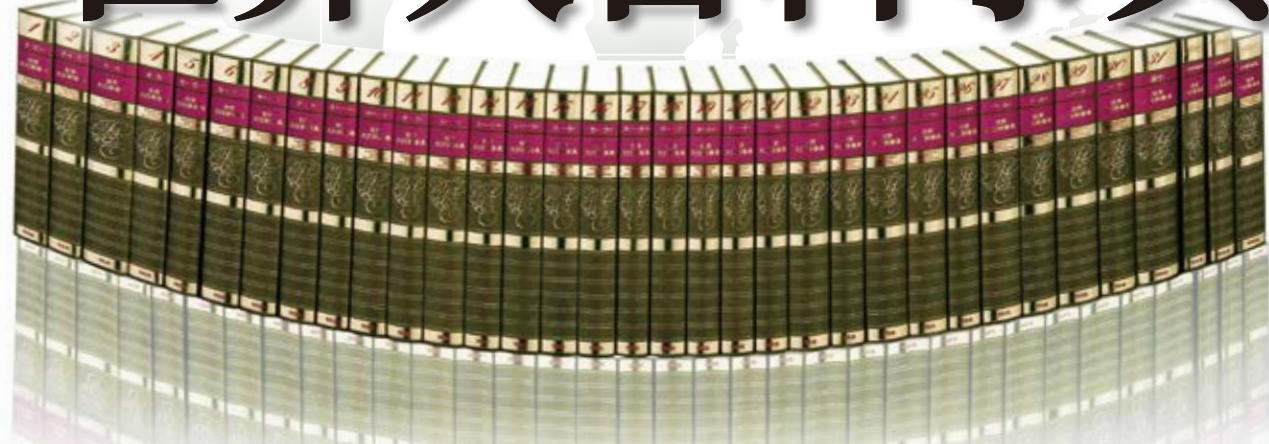


世界に誇る百科事典が満を持して登場！

改訂新版

世界大百科事典



総項目数 9万 総索引項目数 42万
総文字数 6500万 執筆者 7000名

ジャパンナレッジだからできた奇跡のコラボレーション！

百科事典の双璧をデュアルに検索

2大百科の項目をすぐに見比べることができ、それによって事象の理解をより一層深めることができます。まさに図書館レファレンスに無くてはならない強力タグの誕生です。

平凡社：世界大百科事典



小学館：日本大百科全書



※リンクを表示させるには両事典の契約が必要です。



双方の事典に同じ項目が存在する場合には、項目名の右側にリンクボタンが表示されます。



※画像は開発中のものです。公開時とは異なる場合があります。

市民とともに成長する図書館をめざして



図書館びと～長崎市立図書館

長崎市の中心に位置する長崎市立図書館。九州で初めてPFI（Private Finance Initiative、注1）方式でオープンした図書館です。取り組みとして注目されている、おとなのための「調べる学習」講座を中心に、下田富美子さん、矢口育美さん、そして松野都さんに図書館の現在、そして未来像をうかがいました。

矢口さん 下田さん 松野さん

(注1) 民間のもつ経営力、資金力、技術力等を活かす社会資本の整備手法。

2008年にオープンした待望の市立図書館

図書館の使い方を知らない人が多かったですね。

—図書館ができて8年。

—図書館のコンセプトは何ですか？

松野：オープンしたのが2008年1月。前身となる「図書センター」はあったんですが、じつはそれまで長崎市には市立図書館がなかったんです。

松野：「市民とともに成長する図書館」。市民の生活をよりよくするために、スタッフとともにスキルアップしていこうというのが目指すところですよ。

—まさにゼロからの出発だったんですね。

—スタッフ研修がたいへんだと聞きました。

下田：スタッフの中でも、図書館で働めた経験者が10人いるかいないか。司書資格を持っていたとしても対人サービスの経験のない人が多かったんです。市民の中にも「館に入るのはいくらですか？」「本を借りるのはいくらですか？」と言う人もいたり……内外を含めて

矢口：毎月全員が出勤する日が一日あるんですが、その日に研修日を行ったりしています。外部から講師を呼ぶこともありますね。オープンしたてのころは、実務とかレファレンスの研修を受けたりしていました。



ジャパンナレッジフレンドシップ館に!

日ごろから、利用者向けのデータベース講習会だけでなく、図書館のスタッフの勉強会、また司書課程で学ぶ学生さん、そして学校の先生たちに向けた勉強会などでもジャパンナレッジを積極的に利用していただいている長崎市立図書館。フレンドシップ館として、田川政徳館長（写真右）に感謝状を贈らせていただきました。

Library (ライブラリー) から Liferary (ライフラリー) へ

— 建物は全面ガラス張りで開放的です。エントランスのステンドグラス、そして高い吹き抜けが特長の「クロスロード」が印象的です。

下田：気兼ねなく入れる明るいフロアがテーマ。知の交差点を象徴するクロスロードは大通りに面しているため、外気の遮断も意味しています。オープン時からある入口横のレストランは、別の場所で出店していた人気店。閉館時間と同じ20時には終わらねばならないので、相当な企業努力をされていると思います。

— 救護所メモリアルというコーナーもあります。

矢口：図書館は新興善（しんこうぜん）小学校の跡地に建っています。小学校は長崎に原子爆弾が落ちた時、けがを負った人々が治療を受けた救護所でもありました。メモリアルは当時の様子を再現したもの。また新興善小学校のメモリアルコーナーもあり、卒業生など地域の方に愛されています。



クロスロード。「過去と未来」「情報と情報」「人と人」が行きかう知の交差点を意味している。

— 昨年、そして昨年の図書館総合展の講演会では「ライブラリー (Library) からライフラリー (Liferary) へ」というお話が印象的でした。

下田：図書館は無料の貸本屋ではない。一日に何人利用するとか、何冊貸し出しがあるとか、数字ばかりを重視するのではなく、市民への貢献度を高めたいと考えています。自律的に考える軸を市民一人ひとりに持ってもらうために支援するのが図書館の役割だと思えます。これからの図書館は本だけでなく、生活のある場であってほしいと思っています。

大人のための「調べる学習」講座で 図書館の使い方を知る

— 大人のための「調べる学習」講座についてお聞かせください。

松野：「図書館を使った調べる学習コンクール」(注2) というものがあり、2012年度より長崎で地域コンクールがスタートしました。しかし初年度の地域コンクールでは、大人部門の応募がありませんでした。それでスタッフが研修でつくったレポート（「鄭永慶（ていえいけい）は、なぜ可否茶館（かひちやかん）をはじめたのか？～日本最初の喫茶店誕生物語～」）を応募したら、文部科学大臣賞をいただいたんです。応募がないということは図書館で調べることに関心を持っていないということ。子どもたちは学校があるから、学校図書館がサポートしてくれますが、大人はサポートしてくれるところがない。それで、翌13年から「大人」のための「調べる学習」講座が始まったんです。

— どれくらいの方が申し込まれたのですか？

松野：2013年は7名の方が参加されました。初回から最終回まで9回の講座で、半年を超える長丁場です。初回は自己紹介した後に、図書館を探検してもらいます。十進分類法からデータベースまで学んでいただき図書館の使い方をマスターしてもらおう。調べたいテーマをどんどん絞っていく。テーマが決まったら、レポートを書いて発表してもらいます。私はデータベース担当ですが、毎回「ジャパンナレッジ」



新興善メモリアル。校歌や当時のジオラマ、そして賞状やトロフィーなども展示されている。

救護所メモリアル。実際の写真や医師や看護師などの証言が掲示され、医療器具も展示。

レファレンスコーナーは2F「学びのフロア」にある。



— なかでもがん情報サービスは注目されていますね。テーマソングを作られたと聞きました。

松野：長崎県はがんによる死亡率がワースト10以内の年が続いていて、地域の問題として取り組む必要があります。レファレンスコーナーにもがんに関する質問が多数寄せられていました。ただ、当事者でない人は、病院に行くには敷居が高いし、デリケートな事情なのでレファレンスで質問できない人もいます。資料においても、闘病記はあちら、具体的な治療に関する本はこちらというふうに配置が散らばっていたり、マイナーながんについては本になっていなかったり……それに気づいたスタッフの提案で、図書館にがんに関する資料やパンフレットを集めたコーナーをつくったんです。その後、病院と連携して講座を行ったり、その際に相談コーナーを設けたりするようになり、どんどん試みが広がっています。

— ジャパンナレッジはじめ、データベースの講習会も積極的に開催されています。

下田：インターネットで調べるから大丈夫と、おっしゃる方もいるんですが、ただ漠然とネットで調べるのと調べものに適したデータベースで調べるのでは使用感がまったく違う。講習会でデータベースの良さを体験された方は、また利用したいと館に来られます。データベースの利用者講習会を長く続けてきたからこそその成果だと思います。

長崎の世界遺産コーナーや市民活動情報コーナー。いずれも地域活動に役立つ本をセレクト。



がん情報コーナー。ほか介護生活応援、創業応援コーナーや、図書館員のおすすめ本の展示も。

ジ」での検索の仕方をレクチャーしています。長崎の歴史を題材にされる方が多いので、『日本歴史地名大系』は役立っています。

— 2016年で講座も4回目。やってみて、よかった点は？

松野：受講者にとって図書館が身近になったことと、図書館を知ることによって調べる楽しさを感じてもらえたこと。講座期間外でも、熱心に受講者の方が調べている姿を見かけます。受講者さん同士ですごく仲良くなって、切磋琢磨して互いにアドバイスしながら研究されているんです。

矢口：自伝を書こうと一人で調べている方もいらっしゃいます。だけど、集まってお互い調べている内容を話しながら調査することで、刺激があり、互いを高め合うことができるのではないかな、と思うんです。

下田：図書館がいつもなにかをやっているということを見せることが大事だと思うので、スタッフに講座などを企画してもらっています。以前は、「検索機の使い方」や「図書館の使い方」講座をしていましたが、実際に図書館で調べる機会がないので、あまり身につかない。「調べる学習」講座では、まず図書館全般の使い方がある程度知ってもらう。そして図書館を利用してレポートを作成してもらうことで、自分も活性化し、図書館の活用の仕方身につけられる。図書館としても、この人に必要なものは何か、自律的に学ぶために何をしてあげればいいのかはわかってくるんです。

長崎市立図書館が描く 図書館の未来像

— 最後に、長崎市立図書館が描く、図書館の未来像とは？

下田：PFI方式で運営して8年。この契約期間は15年で、いままさに折り返し地点です。「市民とともに成長する図書館」を目指すには、市民は情報の「消費者」ではなく、知識を生み出す「生産者」になってほしいと思います。誰かと話すことで違う価値観、違う選択肢があるんだなって、気づくことがありますよね。司書からいろんな知識を引き出したり、ワークショップなどでいろんな人とつながりながら学んだことを自分のものに変えていく。つまり、図書館は市民のコミュニティ活動の結核点でありたい。そしてその活動から生み出された知識を図書館の資料の一つとしたい。具体的にはワークショップを電子図書のように、映像などで見られるようにできればと考えています。公共図書館の役割として、「人の底上げ」をすることで、「社会全体の底上げ」を期待したいと思います。だから利用者だけが満足するという状態ではなく、社会的にどういう便益をはかることができるかを大切にしたい。図書館は単なる箱ではないし、司書は機械の替わりの作業員ではない。図書館とはどのような場所なのかということをもっと理解され、活用されるように努力しているところです。

(注2) 公益財団法人図書館振興財団が図書館を使った調べる学習を目的に実施。2015年度で19回目となるコンクール。「調べる学習部門」「調べる学習英語部門」「調べる学習指導・支援部門」の応募部門で、小学1年生以上なら誰でも応募できる。



10台のパソコンがあるデータベース用パソコンコーナー。ジャパンナレッジをはじめ19のデータベースが閲覧可能。

大人のための「調べる学習」講座のつくりかた

「市民がそれぞれの学習課題を自ら選択し、図書館を上手く利用し、主体的に学べるように促す」ことをねらいに、2013年度から開催。参考図書や検索機、データベースなどの使い方を学びながら、自分に合ったテーマを絞り、調べていく。半年間9回の講座で、レポート作成期間は2か月半。男女比では男性が多く、リピーターは2、3名くらい。テーマは「長崎街道」、「ジョン万次郎」、「畠中対馬はなぜ長崎なのか」など、長崎の歴史に焦点をあてたものが多い。第2回「調べる学習コンクール」では受講者の宮田忠さんの「西郷四郎（姿三四郎）長崎で活躍す～柔道家 西郷四郎の羅針盤～」が優秀賞・毎日新聞社賞を受賞。ジャパンナレッジでいちばん役に立っているコンテンツは『日本歴史地名大系』。



長崎市立図書館 DATA

2008年1月5日、九州で初めてのPFI方式により開館。それまで日本の都道府県の県庁所在地で長崎市だけ図書館がなかった。基本姿勢は個人や地域レベルで「知識・情報の消費者」から「知恵・情報の生産者」へと働きかけながら、「自ら考え、自ら解決する」活力ある市民社会に貢献することを目指している。

1Fは人気の高い本や新聞などの「ふれあいのフロア」、2Fは専門的な図書、レファレンスコーナー、パソコンコーナーがある「学びのフロア」。多目的ホール、スタディールームなどの「生涯学習エリア」もある。

- ✉ 住所：長崎県長崎市興善町1-1
- ☎ TEL：095-829-4946
- 🕒 開館時間：午前10時から午後8時
(スタディールーム、多目的ホールなど生涯学習エリアは午後9時まで)
- ★ 休館日：毎週火曜日
- 🌐 HP：http://lib.city.nagasaki.nagasaki.jp/

